東日本大震災子ども支援募金
ユネスコ協会就学支援奨学金レポート
2021

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

Annual Report 2021

ユネスコ協会就学支援奨学金

CONTENTS

01　ごあいさつ
02　私たちが 11 年間で取り組んだこと
03　奨学生座談会・事業概要
07　奨学生から、ご家庭から、「ありがとう！」
10　被災地の声 1　奨学生の父
11　被災地の声 2　震災語り部
12　被災地の声 3　被災校の先生
13　ご協力いただいた皆さま
14　会計報告／災害子ども教育支援のご案内／ご協力方法

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟
会長
佐藤 美樹

これからも子どもたちの未来のために

東日本大震災から、11年半の月日が経ちました。大震災で犠牲となられた方々に改めて深く哀悼の意を表します。

日本ユネスコ協会連盟では、2021年度も被災地の子どもたちの学びが絶えることのないように、返還不要の「ユネスコ協会就学支援奨学金」を届けてまいりました。これまでの11年間で3555人の子どもたちを支えることができました。これもひとえに、全国の皆さまからの温かいご支援のおかげです。心より御礼申し上げます。

被災地では、住まいの再建、まちづくり、交通インフラなどの復興が着実に進んでいます。また、地震と津波による被災に加えて東京電力福島第一原子力発電所の事故により避難を余儀なくされた福島県の市町村では、帰還困難区域の一部の避難指示が解除されました。
私たちは、被災地の子どもたちが経済的な理由で高校進学をあきらめることなく、将来の夢に向かって希望を抱き、安心して学び続けられるように、2025年度まで奨学金の支援を継続してまいります。

ここに、2021年度に実施した支援活動をご報告いたしますので、ご高覧いただけますと幸いです。

また2021年度は、今後日本各地で新たに起こりうる自然災害を想定した「災害子ども教育支援」事業を新たに創設しました。これからも災害時の教育支援を続けてまいる所存です。
引き続き、皆さまからの変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。

東日本大震災子ども支援

私たちが 11 年間で取り組んだこと

学校への緊急物資支援

2011 年度

学校を再開するために、まず行ったのが緊急物資支援でした。被災により学習に必要な備品が流失してしまったため、144校・2教育委員会に対し、学校のニーズにあわせて教材や体育用具などの支援物資を届けました。また、仮設住宅や避難所と学校をつなぐスクールバスも寄贈しました。

文化・郷土芸能への支援

2011 年度～ 2013 年度

震災によって危機に瀕した東北の祭り・文化を救ってほしい。そんな被災地の声を受けて、失われつつある日本の自然・文化を未来へ伝える「未来遺産運動」の一環として、人びとの気持ちをつなぐ郷土芸能や祭りへの物資支援を実施しました。

心のケア支援

2011 年度～ 2015 年度

地震と津波への恐怖から強い不安を抱いている子どもたちの、心理的ストレスをやわらげるために、夏休みにキャンプや絵画コンテストなどを実施しました。

社会教育・コミュニティ支援

2011 年度～ 2018 年度

被災地では、仮設住宅で暮らすなど、生活環境が大きく変化しました。被災地のコミュニティ再生を目指して、コミュニティ図書館、学童保育所、移動図書館車、相撲場などを支援しました。

奨学金支援 ユネスコ協会就学支援奨学金

2011 年度～継続中

経済状況が悪化した家庭の子どもたちが安心して学校に通えるように、返還不要の奨学金を3年間にわたって支援する活動を行っています。

奨学金支援 MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金

2011 年度～継続中

両親もしくはいずれかの保護者が死亡・行方不明になってしまった子どもを対象とした、返還不要の奨学金を支給しています。その他、TOMODACHI・MUFG 国際交流プログラムなど、子どもたちの心豊かな成長を応援する活動も行っています。

アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム

2014 年度～継続中

東日本大震災の経験や教訓を全国の学校防災につなげるために、学校への活動助成、教育研修会、実践報告会・減災教育フォーラムを実施しています。

新しい活動が始まりました　災害子ども教育支援

2021 年度～継続中

今後いつどこで災害が起こっても、被災地の学校や子どもたちの教育復興を支援できるよう、あらかじめ資金を募って災害に備える活動を開始しました。支援内容は、被災地の学校などに対する教育復興のための支援、被災地の子どもに対する給付型の奨学金支援、ユースによる復旧・復興ボランティアに対する旅費等の一部補助です。

奨学生
座談会

かけがえのない高校時代 それぞれの夢を追いかけて

ユネスコ協会就学支援奨学金は、東日本大震災直後から被災地の子どもたちの学びを支えてきました。今回、2019年度から3年間の奨学金受給期間を終えて、2022年春、高校3年生となった元奨学生たちに、学校生活や将来の夢、家族をはじめ大切な人たちへの想いを語ってもらいました。

参加してくれた元奨学生 右から
森村 翔さん（宮城県石巻市）
江本 友香さん（宮城県気仙沼市）
石川 郁人さん（岩手県陸前高田市）
※元奨学生の氏名はすべて仮名です。

2021年度実績

受給者数／269名
支援地域／宮城県（石巻市、岩沼市、気仙沼市、仙台市、多賀城市、名取市、東松島市、女川町、南三陸町、山元町、亘理町）
岩手県（大船渡市、宮古市、陸前高田市、大槌町、山田町）
福島県（いわき市、相馬市、南相馬市、富岡町、楢葉町、双葉町）
奨学金給付額／6456万円
2011年度からの累計給付人数／3555名

支援概要

対象者

地震や津波による家屋の流失・損壊や原発事故の影響による避難などの理由で経済状況が悪化した家庭の、高校進学を希望する中学3年生。
※震災により、保護者を亡くした生徒を除きます。

給付額と期間

奨学生一人当たり月額2万円を3年間給付します（返還不要）。
※中学3年次から高校2年次まで。

対象地域

岩手、宮城、福島の3県で被害の大きかった市町村を特定して実施しています。

自分の通っている高校が好き

江本 友香さん：何か辛いことがあったとき、「元気ないね」と話しかけてくれるとか、生徒に対して細やかで親身な先生が多いです。だから安心感があるし、悩みを打ち明けられやすい環境だなと思います。

石川 郁人さん：先生も生徒も、自分がやりたいことや目指していることを、あまり否定せずに応援してくれます。だから、将来のことも隠さず、わりと気軽に話せるのがいいなと思います。

森村 翔さん：僕の担任はかなり個性的な人で、クラスメートの間で人気があります。英語の先生なのですが、基礎からしっかり教えてくれるからわかりやすいし、授業が面白い。これまでより英語が好きになったと思います。

石川：僕も大好きな日本史の先生がいます。教壇に立って一方的に教えるのではなく、ずっと教室の中を歩き回っている。教科書の内容だけでなく、広がりのある授業をしてくれるので、ついつい聞いてしまって(笑)、さらに日本史が好きになりました。

部活に燃えています

森村：僕は陸上部で、高校最後の引退試合が5月にありました。でも、その前に脚に大ケガをしてしまって…。引退試合ではリレーにだけ出場しましたが、走っている途中から足が痛くなって、タイムも思うように出せなかった。それでも、同級生やリレーを組んでいた後輩たちが、僕がめげないような雰囲気をつくってくれていたおかげで、なんとか最後まで走り切ることができました。その試合で部活は終わったので、いまは勉強とケガの療養に専念しています。

江本：私は吹奏楽部でオーボエを吹いています。オーボエは大きな音は出ないけれど、いくらでも表現の幅があるし、音自体もいちばん好きな楽器です。部としては2年生のとき久々に県大会まで進めたので、最後となる今年も夏の大会に向け力が入っています。自由曲はミュージカル『ミス・サイゴン』から4曲をメドレーで演奏する予定です。

石川：僕は文章を読むことが好きだったので、報道部に入りました。校内新聞をつくったり、学校行事やコンクールのための写真を撮ったりと、いろいろな活動をしていました。部長をしていた2年生のときは朗読の大会で県3位となり、結果を残せてよかったです。朗読大会では、宮沢賢治の作品を読む人が多い中、僕が朗読したのは野村胡堂の『銭形平次』。皆、知らないだろうなあ（笑）。

高校生活はコロナ禍のまっただ中

江本：夏の吹奏楽の大会が、高校1年のときコロナで中止に。中学のときお世話になった2学年上の先輩と一緒に吹きたかったのに、それができなかったのが残念です。

石川：報道部で参加した朗読の大会も、ホールで直接読む予定でしたが、やはりコロナのために録音したものを届けるという形になりました。その後の全国大会も、やはり録音による審査でした。

江本 友香さん

気仙沼市で被災、同市の高校に通う。中学のときから吹奏楽部で、中学ではクラリネット、現在はオーボエ担当。将来は音楽で地元を元気にしていきたい。

石川 郁人さん

陸前高田市で被災、大船渡市の高校に通う。中学まで運動部だったが、高校から報道部。将来は心理学を学び、それを活かせる仕事に就きたい。

森村：部活の陸上の練習がコロナで休みになったのは、僕が高校に入学する前からでした。それで、1人で練習するようになりました。中学までは先生の教えてくれた練習をただやるだけで、自分では何も考えていなかった。走り方もですけど、睡眠時間や食事なども適当だったんです。でも、自粛期間中に、YouTubeの映像を参考にしながら、自分なりに噛み砕いて練習内容を見直していきました。コロナ禍があったから、自分で調べて自分で考える力がついたと思っています。

震災と、その後の暮らし

石川：震災のときは、親が保育園に迎えにきてくれて一緒に避難しました。その途中で後ろを振り返ったら、黒い波の塊がきているのが見えて、もう少し遅かったら自分も流されていたのかなと。亡くなった友だちもいますが、辛いとか悲しいというよりも、呆然とする感じで、震災については考えることを避けてきたのかもしれません。

江本：自宅が全壊したので、仮設住宅に8年くらいいました。壁が薄くて隣の家の音がよく聞こえましたが、同じ仮設の人たちと友だちになれたし、そんなに嫌ではなかったです。いまは自宅を再建しましたが、ずっと暮らしてきた仮設が撤去されたので、自分がいまどこに住んでいるのかわからない感じがします。

石川：自宅と親の会社が全壊したので、祖父母の家で暮らしてから仮設住宅に入りました。僕も、仮設では新しい友だちができて楽しかった記憶があります。

親への思い、地元への思い

森村：僕の親は何不自由なく僕を育ててくれました。震災では家が全壊して大変でしたが、進路についても否定をせず、やりたいようにやらせてくれています。迷惑をかけていますが、しっかり面倒を見てくれていることがすごくありがたいです。

江本：復興していく中で、身内での節目かなと思ったのは家の再建です。親は「不自由な生活をさせていた」と思っていたようです。でも、家を建ててくれたことより、私たちが子どもらしくのびのびできるようにと苦心していた、その思いがうれしくて「ありがとう」といいたい。

石川：2人の話を聞いていて、僕の気づかないところで、両親や周りの人たちが僕に無理をさせないよう配慮してくれていたことに気づきました。すごく感謝したいし、自分はまだ気持ちの整理がつかなかったり、反抗期だったりするんですが、大人になったら少しずつ恩返しをしていきたいです。

森村：震災後、地元では見た目の変化がいっぱいありました。家の近所にも大きな道路ができて、そこで走る練習もしています。一方で、地域の祭りとか伝統はまだ残っていて、それが自分の根っこにつながっている気がします。石巻の高台にある日和山（ひよりやま）神社へは毎年、部活で初詣に行き、何段もある神社の階段で走り込みをしたり、おみくじを引いたり。そんな思い出しかないんですけど、日和山は僕にとって特別な場所です。

石川：僕はずっと陸前高田の町に住んでいるのですが、人がすごく温かいなと思います。道で会ったら知らない人でも挨拶をするし、人情がある。津波で町はだいぶ流されましたが、「アバッセたかた」という大型商業施設ができて、とても便利になりました。いまでは町の人たちが集まる場所になっています。

夢の翼を大きく広げて

森村：僕はスポーツをメインにやっている大学を志望しています。高校の卒業生もそこで陸上をやっているので、先輩たちと一緒に陸上を続けたいし、まだ経験したことのない全国大会にも出たい。年齢の枠を超えた大会で戦っていきたいです。そして、自分が集中できる種目を見つけたい。そのためにもケガをしっかり治します。卒業後は、少しでも親に迷惑をかけないよう、経験を活かせるスポーツ関係の仕事に就ければと考えています。

江本：第一志望は宮城県にある教育大学の音楽科です。中学のとき、全国大会で金賞を獲ったような人が気仙沼へ来て、無償で音楽を教えてくれました。その人は厳しく叱ったりしないので、理由を聞いたら「結果を出すよりも、まず音楽の楽しさを知ってほしい。音楽を続けてほしいから」と。私も、音楽の楽しさとともに、吹奏楽で少しでも気仙沼を音楽で盛り上げたいです。だから、大学を卒業したら気仙沼に戻るつもりです。夢は音楽の先生。お世話になった先生のように、今度は私が生徒の気持ちに寄り添って、「1人じゃないよ」って伝えられるような先生になりたいです。

石川：大学では心理学を勉強したいです。自分は大丈夫だったのですが、震災などで心に傷を負った人や、ほかにもいろいろな悩みを持っている人がいると感じていて、そういう人たちが何を思っているのか、また、どうすればいい方向に向かえるのかを研究したい。心理といえば心理カウンセラーくらいしか知らなかったけれど、最近いろいろな職業があることを知ったので、心理に関わる仕事に就きたいと思っています。

森村 翔さん

石巻市で被災、同市の高校に通う。小学生のときは長距離、中学から短距離を走る陸上男子。大学に入っても、社会人になっても陸上を続けていきたい。

「奨学金によって学ぶチャンスをいただきました。たくさんの人たちのご支援があったから、いまの自分たちがいます」

奨学生から、「ありがとう！」

高校1、2年生の奨学生と、支援が完了した高校3年生、そして保護者の方たちからのお便りを紹介します。

奨学生より

高校1年生／2021年度奨学生より

11年間いろいろな人達に支えられてすごして来た事に感謝をしています。
そして11年経っても支援して下さる皆様にもありがとうございますと伝えたいです。
せっかく頂いた支援ですので、大切に使いたいと思い、受験の半年間 行っていた学習塾を続けて行かせてもらうようにしました。
週1回ですが、大学進学にむけて勉強と3年間続けてきたサッカーをがんばりたいです。
そして、支えてもらった恩を忘れず、今度は人の役に立つ人間になりたいです

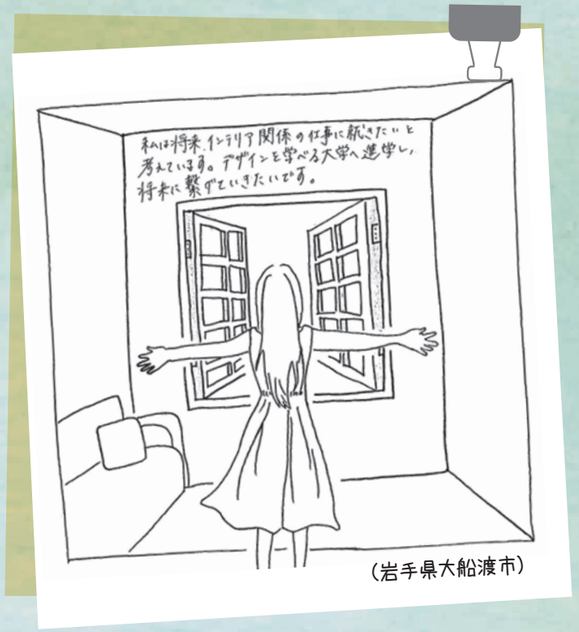
（宮城県仙台市）

コロナで思うようにいかない3年間ではあったけれど、その中で出来るかぎりの思い出を作る事ができたのでよかった。高校では資格取得に向けて勉強を頑張りたい。後は部活動や、コロナで中学校で、出来なかった事などをやりたいです。
そして、震災から11年が経過し、復興が進んできたりしているので、今後もし地震で津波が来た時は震災の勉強で学んだ事を生かしていきたいです。
最後に募金をしていただいた全ての方々へ感謝します。
支援金は、部活動に必要なもの等を購入し、1つでも多く試合に出て、勝てるようにがんばりたいと思います。
ありがとうございました。

（岩手県宮古市）

（岩手県山田町）

高校3年生／2019年度奨学生より



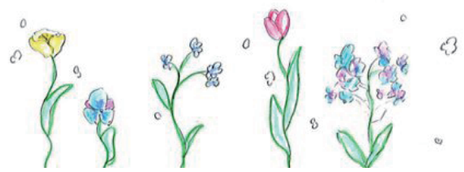
（岩手県大船渡市）

高校2年生／2020年度奨学生より

東日本大震災から11年ですが、まだ経済状態はあまりよくありません。次々と震災の支援がなくなっていく中で、11年経っても奨学金を支給していただき、すごく助かっています。
まだ学生で、世の中のお役に立つことはできませんが、この奨学金を将来のためになるように使います。いまは一生懸命勉強して、大学進学を目指しています。
奨学金をいただいているおかげで、できなかったこともできるようになりました。
本当にありがとうございます。

（宮城県石巻市）

いつも、奨学金をくださりありがとうございます。
皆さんのおかげで、私も無事進級することができました。
昨年は、特に英語の勉強に力を入れ、英検準2級を取得することができました。
高校生活も中間地点に入り、そろそろ進路に向けた勉強を始めようとしています。
今はまだ明確な進路は決まっていませんが、自分の選択肢を広げられるように、毎日の勉強を頑張ろうと思います。



（宮城県南三陸町）

3年間、ご支援いただき、ありがとうございました。
ご支援のおかげで、部活動の遠征や漢字検定、模試など、様々なことに活用させていただくことができました。
今後は、進学し看護の道を目指したいと思っています。
震災では多くの命が失われ、今もコロナにより数えきれないほどの尊い命が失われつつあります。
私は少しでも世の中の助けになりたいと考えています。
これも、支援してくださった方々の支えがあったからこそここまで進むことができたのだと思っています。
私も困っている人のためにこれからも頑張ります。
長い間のご支援、本当にありがとうございました。

（宮城県気仙沼市）

支援者の皆様へ

コロナウイルスの感染拡大がおさまらず、なかなか落ち着かない日々ですが、皆様はいかがお過ごしでしょうか？
東日本大震災時に幼稚園卒園間近だった私は、自宅2階に逃げて九死に一生を得ました。大津波のすごさに声をだすことができませんでした。あの経験は今でも忘れてはいけないと思っています。
私は絵を描いたり、物を造ったりすることが好きなので美術部に入部し、様々なテーマの作品作りに取り組んでいます。先日、県の高校生を対象とした美術展で入賞することができました。一つ一つ丁寧に時間をかけて完成した作品だけにとても嬉しく思っています。
高校卒業後の進路として、大学進学を考えています。塾に通ったりし、学力の基礎固めから応用力まで定着させ、目標実現のためがんばりたいと思います。ご支援ありがとうございました。

（宮城県石巻市）

ご家庭から、「ありがとう！」

保護者の皆さまより

震災から11年が経ちました。私にとってこの11年は、本当にあっという間でした。当時、娘は3歳で、避難所で誕生日を迎え4歳になりました。時が経つのは早いもので、いまは高校1年生です。
中学校ではテニス部に入り、毎日真っ黒になりながら練習をがんばってきました。途中でコロナが流行し、練習の制限、無観客試合、親の応援NGなど厳しい環境になりましたが、すごく楽しい3年間を過ごすことができたと思います。
高校では弓道部に入るそうです。これからも自分がしたい方向に進み、楽しく過ごしてほしいと思います。
奨学金は高校卒業後の専門学校での費用に役立てたいと思っております。皆さまからのご支援、本当に嬉しく思います。ありがとうございました。大切に使わせていただきたいと思います。

（宮城県南三陸町）

本当は息子が書くべきなのですが 今入院中なので 私（祖母）が変わりに書かせていただきます。
大震災から11年の月日が過ぎたのですね。11年前孫は小学校に入学する予定で 机やランドセル全て揃えて喜こびいっぱいでした。
それが突然 奪われたのです 何もかも全て失いましたが 幸い 家族だけは生かされました。たくさんの人達（ボランティアさん 物資を届けてくれた人々）にお世話になりました。
震災は、悲しくつらいことですがでも良いこともいっぱいありました。たくさんの人達とのつながり今は私達の財産になっています。
日本ユネスコ協会様にも3年間 募金をしていただいた方々 本当に御支援ありがとうございました。おかげ様で 昨年12月に修学旅行があり思い出がたくさん出来たと喜んでました。
今高二、もう三年になりますが 自分のやりたいことを見つけた様に思います。オープンキャンパスにも進んで行ってるみたいです。祖母としては目標に向かって頑張って欲しいと思います。
皆様からいただいた愛ある御支援で孫も心やさしい大人になることを願っています。
本当に本当にご支援ありがとうございました。

（宮城県石巻市）

日本ユネスコ協会連盟 様

東日本大震災から11年、息子二人と必死に前を向いて来ました。
離婚をしてシングルマザーとなった私にとって 不安でしたが
今回の給付型奨学金のご支援で子供達の生活を
助けて頂きました。
本当に感謝しかありません。本当にありがとうございました。
新年度は 高校3年生となり大学進学に向けてスタートします。
就職コースの公務員から 大学コースへと進路も変わりました。
進学は国外になる為、親としては寂しい気持ちもありますが
本人の将来への幅広い可能性を広げたいという意志を尊重し
応援することに決めました。親として今しかできないサポートを
していきたいと思います。これまでのご支援のお陰で、塾に
通うことができ、制服のブラウスの替えを購入する事もできました。
部活動に励み、学業に専念できる環境を作る事が
できました。長い間ご支援をして頂き、心から感謝して
おります。平和な社会の実現に私達も微力ながら
一緒に目指していきたいです。日本ユネスコ協会連盟様
の、日本全国、世界への活動は忘れません。

（宮城県気仙沼市）

被災地の声 1

奨学生の父 ～福島県双葉町

「移動中」の日々。それでも娘の夢を応援したい

檜山 正彦さん（仮名）

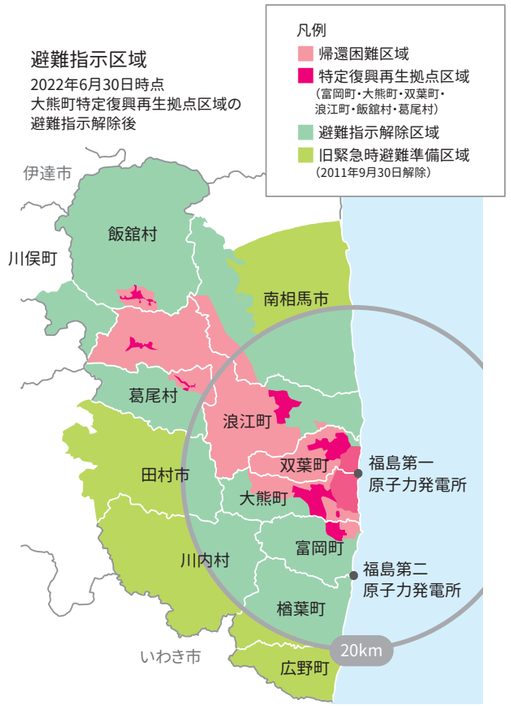
福島県双葉郡双葉町で生まれ育ち、農業を営んでいた檜山正彦さん。東日本大震災の際に起きた東京電力福島第一原子力発電所の事故で家を追われてから、既に11年が経ちました。

家自体に大きな被害がなかったことから、震災当夜は地鳴りの続く中、自宅にいたそうです。ところが翌朝「原発から放射性物質が漏れている」との防災無線で、とりあえず毛布数枚を車に積んで家族4人で出発。それが、檜山さん一家の長い移動の日々の始まりでした。

被災2日目は町指定の避難所で寒い夜を過ごし、翌朝、新聞で初めて原発が爆発したことを知ります。あわてて群馬に住む兄のもとへ向かい、さらに東京の兄の家でも数週間過ごした後、群馬県大泉町へ。そこで3年ほど過ごしてから、双葉町が全町避難していた埼玉県加須市で暮らし始めました。

「こっちに避難している人たちは皆、同じ気持ちなんだよね。誰に聞いても『戻りたい』って。でも、戻れなくなってしまった。10年近くいると生活の基盤ができるし、子どもがいればなおさらです」

とはいえ、住民票はいまも移さず双葉町のまま。加須市に家は建てたものの「終の住処とは思わない。まだ移動中という感覚だ」といいます。



福島県ホームページより作成

娘のまっすぐな夢を支えたい

この春、高校生となった次女のあおいさん（仮名）は、ユネスコ協会就学支援奨学金の奨学生。震災のときは保育園児で、すでに埼玉での生活の方が長くなりました。小学生のときに空手を始め、中学の体育祭では体育委員として学年優勝を勝ち取り、高校ではテニス部に入るなど、活発に学生生活を過ごしています。さらに、小学5年生から続けているのがエレキベース。アニメの声優などがやっているバンドに刺激を受けたのがきっかけだとか。以来、楽器店のベース教室に通いながら、練習に余念がありません。夢はスタジオミュージシャンになることだそうです。

「高校を卒業したら、音楽の専門学校に進みたいそうです。すごく上手という感じではないけれど、まあまあかな」と笑う正彦さんですが、自分で選んだ道だからと、ずっと応援を続けています。

「道のりは大変かもしれない。後悔することもあるだろうけれど、自分で納得して決めたのなら続けていってほしい。いただいた奨学金は娘が夢を描く手助けとなっています」

いまは「地元」となった埼玉で夢を追う娘を、檜山さんは温かく見守っています。

この春、高校の入学式で

ベース教室の発表会で演奏するあおいさん

被災地の声 2

震災語り部 〜岩手県釜石市

ていねいに暮らすことが地域の防災につながる

菊池 のどかさん　震災語り部

岩手県釜石市にある「いのちをつなぐ未来館」は、震災の伝承と防災学習のための施設です。ここで震災の語り部として活動していた菊池のどかさん。菊池さん自身も、釜石東中学校3年のとき震災を体験しています。当時の学校は大槌湾に面した鵜住居地区にあり、隣の鵜住居小学校児童とともに高台へ避難しました。

「先に中学生が逃げて、後から避難してきた小学生と合流しました。でも、『ここは危ないんじゃないか』ということで、さらに上を目指すことに。そのとき、当時の中学校副校長が『小学生たちと手をつなぎなさい』と指示を出したんです」

菊池さんたちはおのおの小学生の手を取り、高台へと急ぎました。

この震災での釜石市の死者・行方不明者は約1300人。鵜住居地区も津波で壊滅状態となったものの、鵜住居小学校と釜石東中学校にいた児童・生徒約570人は全員無事に避難できました。このことは「釜石の奇跡」とよばれています。

その後、「釜石の奇跡」の体験者として何度か取材を受けるうち、菊池さんにはさまざまな葛藤が芽生えてきたそうです。

「私の自宅は山の方なので家族も家も無事でした。そんな私が話していいのだろうか、私の話は被災者を苦しめるのではないか、などと悩みました」

菊池さんの葛藤は、被災者への誠実な思いがあるからこそ。いったんは大学進学で釜石を離れたものの、卒業後に選んだ仕事は地元に戻って震災を伝えることでした。

「未来館では、私が見てきたものを脚色せずに伝えたいと思いました。ただ、私はいま10年前の震災のことは話しているけれど、これからの防災についてはどうだろう。勉強も足りていないし、もっとやるべきことがあるのではと考え始めて…」

2年後に未来館をやめ、地域の防災や暮らしを総合的に考える会社に転職しました。

津波が迫る中、中学生と小学生が手を取り合って高台へ避難した（撮影：浦山文男氏）

地域の皆で生きていくために

新しい会社でも、持ち前の向上心でネットワークを広げていった菊池さん。次第に個人で受ける仕事が増え、大学のゼミでお世話になった先生とは、地域防災に関連する研究も始まっています。

「地域の人が皆で生きていくために何ができるか。次第に、そういう方向に目が向くようになりました」

菊池さんの住む釜石市橋野町には、かつて日本の近代化に貢献した鉄鉱山があり、世界遺産の構成資産にもなっています。ただ、明治時代に燃料として大量の木を伐採したため、森の保水力が弱まり、川の位置が変わるほど水害が頻発したとか。

「いま思えば、大事に生きていけ、ということなんだと思います。普通の生活をていねいに積み重ねていくことが、防災につながるんだと」

暮らし方や食べ方も含めて、人や自然と共生するためにどう生きるか。これからの防災を考えるとき、そういう視点を大切にしていきたいと語ってくれました。

震災後、高台に移転した母校釜石東中学校で

被災地の声 3

被災校の先生 〜宮城県気仙沼市

自分たちが地域を支える。そんな生徒たちが「島の宝」だ

伊東 朋子先生　気仙沼市立津谷中学校 教諭

東日本大震災が起こったとき、伊東朋子先生が勤務していたのは気仙沼市立大島中学校。気仙沼大島という島の学校です。いまでこそ立派な橋が架かりましたが、当時、気仙沼本土との行き来はフェリーしかなく、伊東先生はじめ多くの教師が震災で島に取り残されました。一方、島外で働いていた生徒の親たちも、島に帰ることができなくなっていました。その日から、先生や生徒たち、島の人たちの復興への懸命な日々が始まります。

「すでに下校している生徒もいましたが、地域のネットワークもあり、遅くとも震災翌日には生徒全員の無事が確認できました。その後、4月からの新入生の家も含めて被害の状況を確認するため、先生たちと手分けして生徒の家を1軒ずつ歩いて回りました」

津波で気仙沼大島の港は壊滅状態となった

伊東先生は職員室か、避難所となった隣の小学校の体育館で過ごしていました。不自由な中でも、避難所には旅館や個人のお宅から、食事や布団などが次々と提供されたそうです。

「もともと本土とつながる手段がフェリーだけだったので、皆さん備蓄型の生活をされていたように思います」

最後の生徒数30人の大島中学校から、津谷中学校へ赴任して3ヵ月。「生徒の数がいっきに増えて戸惑っています（笑）」

避難所の運営も生徒たちで

震災の数日後には、小さな臨時旅客船が本土との間を結ぶように。しかし、その後も伊東先生は、島に渡ると数日間は学校に滞在するという日々をおくっていました。

「学校としては、春休み中もできるだけ生徒を学校に呼んで、なんとか普通の日常を取り戻そうとしていました」

そんな中、伊東先生は生徒たちのがんばる姿に胸を打たれたといいます。

「自発的に避難所の運営を手伝ってくれていたんです。井戸に水を汲みに行ったり、家から避難生活に必要なものを持ってきてくれたり。島外で働く親が無事かどうかもわからないうちから、『自分たちが働き手だ』『大人を元気づけよう』という気持ちがあったようです」

実際、生徒たちの家庭の多くが震災によって経済的に不安定となりました。

「お仕事の状況が急激に変わったご家庭は多かったです。それでも、返済不要のユネスコ協会就学支援奨学金によって、子どもたちは安心して将来について考えることが保証されたと思っています」

子どもは大人の分までがんばろうとし、大人は子どもを誇りに思い、皆で力を合わせて乗り切った震災。その年に伊東さんは結婚し、やがて2児を出産。震災後の11年を、子育てしながら大島中とともに歩んできました。そして2022年の春、大島中学校は75年の歴史に幕を閉じました。

「震災直後の卒業式でPTAの方がおっしゃいました。『中学生は島の宝だ』と。大島のそんなところが好きです」

2021年度も多くのご支援をいただきました。

ユネスコ協会就学支援奨学金は、以下の企業・団体をはじめとする多くの皆さまのご協力で成り立っています。
この場をお借りして、改めてお礼申し上げます。

あいおいニッセイ同和損保 MS&AD INSURANCE GROUP あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	秋田大学医学部サッカー部OB/OG会 秋田大学医学部サッカー部OB/OG会	AXA アクサ生命 アクサ生命保険株式会社	AXA アクサダイレクト アクサ損害保険株式会社
獺祭 旭酒造株式會社	NTT docomo NTTドコモグループ災害復興等応援社員募金	光明 KOUMEI 株式会社光明工事	信用金庫 一般社団法人全国信用金庫協会
JR東日本 東日本旅客鉄道株式会社	FOREVER® フォーエバーリビングプロダクツ ジャパン	ブルーチップ® ブルーチップ株式会社	BearCeréju 株式会社ベルセレージュ本社
ほるぷA&I 株式会社ほるぷエーアンドアイ	MUFG 三菱UFJニコス 三菱UFJニコス株式会社		

※50音順・敬称略

ご協力いただいたユネスコ協会

北海道ユネスコ連絡協議会、旭川ユネスコ協会、札幌ユネスコ協会、小樽ユネスコ協会、北広島ユネスコ協会、花巻ユネスコ協会、北上ユネスコ協会、高崎ユネスコ協会、寄居地方ユネスコ協会、港ユネスコ協会、飯田ユネスコ協会、名古屋ユネスコ協会、伊丹ユネスコ協会、認定特定非営利活動法人 市川市ユネスコ協会、清水ユネスコ協会、西宮ユネスコ協会、徳島ユネスコ協会、光ユネスコ協会

ご協力いただいた皆さま

個人募金者の皆さま	全国の個人募金者の方々から多くのご支援をいただきました。
企業・団体の皆さま	上記でご紹介しきれなかった企業・団体の皆さまからも、たくさんのご協力をいただきました。
子どもたちから子どもたちへ	幼稚園から大学まで、子どもたちや学生の皆さまからも、心のこもった寄付が寄せられました。
ユネスコ協会・クラブ会員の輪	ユネスコ協会・クラブも継続した支援活動を行なっています。また、維持会員・賛助団体会員・個人会員の皆さまからも、ユネスコ精神のもと温かいご協力をいただきました。

会計報告

東日本大震災子ども支援募金（2021年4月1日～2022年3月31日）
ユネスコ協会就学支援奨学金

項目	金額
前期繰越	260,363,323
寄付額	118,013,314
支出額	76,510,767
①奨学金	64,560,000
②事業経費	11,950,767
次期繰越	301,865,870

（単位：円）

※ユネスコ協会就学支援奨学金は、原則として、奨学生1人につき3年間にわたって支援します。
※次期繰越金は、2020年度に採用した奨学生の3年目分の給付に係る事業費用および2021年度に採用した奨学生の2～3年目分の給付に係る事業費用、そして2022年度に新規採用する奨学生の3年間分の給付に係る事業費用などを含む2022年度以降の本奨学金事業に使用されます。

ご案内

いつか起こる災害から子どもたちの未来を守るために。

災害子ども教育支援

東日本大震災子ども支援募金・ユネスコ協会就学支援奨学金事業は、2025年度まで奨学金の給付を続けますが、ご寄付の受付は2022年度で終了いたします。これまで12年間にわたりご協力いただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。
当連盟では、本事業を引き継ぐかたちで、今後日本各地で新たに起こりうる自然災害を想定した「災害子ども教育支援」を昨年度創設しました。各地の子どもたちが夢や進学をあきらめることなく、それぞれの描く未来に向かって進むことができるよう、これからも教育支援を続けてまいります。
「災害子ども教育支援」では、発災時に迅速な支援ができるよう、平時からの募金を指定募金として積み立てます。
引き続き、皆さまの温かいご協力をお願いいたします。

「災害子ども教育支援」へのご協力方法

日本ユネスコ協会連盟へのご寄付は、寄付金控除などの対象になります。

郵便振替による募金

ゆうちょ銀行または郵便局からもご寄付いただけます。

郵便振替 00190-4-84705

加入者名：公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

※通信欄に「災害子ども」とご記入ください。※振込手数料免除。※領収書が必要な方は、大変お手数ですが、当連盟までご連絡ください。※同封の払込取扱票もご利用ください。

インターネットからの募金

ホームページからクレジットカード決済による募金をお申込みいただけます。

ユネスコ 検索

unesco.or.jp

毎月の継続的な定額募金『月1・いいことプログラム』

クレジットカードの場合

ホームページから直接お申込みいただけます。

月1いいこと 検索

unesco.or.jp

口座振替の場合

口座振替申込書をお送りします。お手数ですが、ご希望の方は当連盟までご連絡いただきますようお願いいたします。

遺贈

遺言によりご自身の財産を贈与(寄付)いただく方法です。不動産の遺贈や相続財産の寄付などのご相談もお受けしています。ご希望の方には、手続き方法などを掲載したパンフレットをお送りします。

お問い合わせ

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 災害子ども係
TEL：03-5424-1121（9:30～17:30／土・日・祝日を除く）・FAX：03-5424-1126・メール：kodomo@unesco.or.jp

日本ユネスコ協会連盟の活動

私たちは「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と謳(うた)う国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の理念に賛同し、全国に約280あるユネスコ協会・クラブとともに1947年から草の根で活動を続けるNGOです。

平和な世界を構築し持続可能な社会を推進することをミッションに掲げ、国内外でさまざまな活動を展開しています。国連が提唱する持続可能な開発目標＝SDGs（Sustainable Development Goals）のうち、とくに目標4「質の高い教育をみんなに」を重点ゴールに据え、達成に向けて以下のような事業に取り組んでいます。

※2021年度の活動については別冊「2021年度活動レポート」をご覧ください。

いつか起こる災害から子どもたちの未来を守る	学校における減災教育をサポート	学校との連携を通じたSDGs教育の充実
災害子ども教育支援	**アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム**	**SDGs達成に向けた次世代教育**
日本の自然や文化を守り伝え、持続可能な地域社会に貢献	**途上国での専門的な人材養成、子どもの文化学習を促進**	**途上国の学びを支える さまざまな教育支援**
未来遺産運動	**世界遺産活動**	**世界寺子屋運動**

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

https://www.unesco.or.jp

私たちは持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

2022年9月発行